書　評

松村昌家編『日本とヴィクトリア朝英国――交流のかたち』（大阪教育図書、2012 年）

村岡　健次

本書はその表題からも知れるように「日本とヴィクトリア朝英国」の文化交流の諸相を論じたもので、次の五編の論考からなっている。

（一）松村昌家「アームストロング砲――戊辰戦争への過程」

（二）山口恵里子「英国ヴィクトリア朝の日本趣味と明治芸術のラファエル前派受容――中世主義と装飾芸術を結び目として」

（三）福田真人「帝国・病気・医学――日英交流の一端」

（四）中島俊郎「文化の基層をもとめて――A. B. ミットフォード」

（五）大田垣裕子「イザベラ・バードと漱石――異国見聞の西東」

ヴィクトリア朝は字義どおりには、ヴィクトリア女王の即位（1837 年）から逝去（1901 年）までを指す。五つの論考は、なかには 18 世紀や 20 世紀にわたるものもあるが、総じてこの時期、より限定するなら 19 世紀後半を中心としていると言ってよい。

19 世紀後半の日本は、黒船来航（53 年）という外圧に始まり、まずはその後十数年、安政修好通商条約（58 年）による開国、苛烈な攘夷運動、薩英・下関両戦争（63・64 年）、西南雄藩の倒幕運動、王政復古（67 年）、戊辰戦争と続くまさに革命・動乱の一時期を経験した。そしてその後に 20 世紀初頭にいたる文明開化の明治近代が来るのだが、その文明開化を突き動かしたのは西洋に追いつけ追い越せという近代化・西洋化の衝動であった。この動きはすでに幕末には始動していたが、明治の新政府が富国強兵を究極の国家目標に据えたことで本格化した。それは、夏目漱石に言わせれば否応なしの強力な「外発力」で、「この圧迫によって吾人はやむをえず不自然な発展を余儀なくされるのであるから今の日本の開化は地道

にのそりのそりと歩くのではなく、やっと気合をかけてぴょいぴょい飛んでいくのである」。だからそれは上滑りにならざるをえず、「また滑るまいと思って頑張るため神経衰弱になるとすれば、どうも日本人は気の毒といわんか憐れといわんか誠に言語道断な窮状に陥ったものであります」(「現代日本の開化」)。英文学研究の官命を受けてロンドンに留学した彼が、この言葉のとおり神経衰弱になってしまったのは周知のところだろう。

この文明開化、即ち近代化・西洋化の圧力は、政治・経済・軍事・法制・科学・技術・学問・芸術等のあらゆる面に働き、かくして幕末から明治時代にはこれらの全領域で西洋と日本、それゆえ英国と日本のあいだにもかつてない文化交流が生まれた。書評の必要上、この文化交流の特色を予め二点指摘しておきたい。

(1) この交流は、つとに福沢諭吉が看破したように、西洋即ち文明国、日本即ち野蛮(福沢の呼称では半開)国のあいだに生じたもので、この落差が国際的には万国公法の論理となり(明治の外交課題が不平等条約の撤廃であったことを想起)、西洋人のテクストの文面では、しばしば日本ないし日本人にたいする上から目線となって現われた。(2) 幕末・明治期の西洋と日本の文化交流には、少なくとも二つのタイプが明確に見て取れる。第一のタイプは科学・技術の交流にその典型を見る。この分野では近代化は即西洋化で、交流は原則的に西洋文明(先進)国から野蛮(後進)国への一方通行となり、日本はひたすら受容・学習する立場に立たされる。第二のタイプはとりわけ芸術・文学などの精神文化にかかわる。この分野は第一の場合のようにはゆかない。というのも野蛮国といえども、そこには固有の伝統的文化の連綿たる継続があり、文明国西洋人の眼はそれを見ないわけにはゆかなかったからである。こうして幕末から明治にかけて大量の浮世絵や工芸品が買い叩かれて海を渡り、B. H. チェンバレンやフェノロサやハーンが日本にやってきた。

以下本書の各論考を見てゆこう。

(一) 松村論文　アームストロング砲とはアームストロング社が 1850 年代から 60 年代にかけて製造した後込め施条砲(rifled breech loader–RBL)のことで当時世界最新鋭の大砲であった。この大砲は英国軍艦に装備されて薩英・下関両戦争で使われ、薩長両藩を攘夷から開国に転じさ

せただけでなく、その製法が佐賀藩によって学び取られ、その大砲が戊辰戦争の過程で上野の彰義隊討伐と会津鶴ヶ城の攻略に用いられて官軍の勝利、それゆえに明治維新政府の成立に貢献した。この大砲製造技術の流入は、先に指摘した科学・技術における文化交流の一例と言ってよかろう。本論は英国でこの大砲が生まれるまでの成立事情にはじまり、薩英・下関両戦争から戊辰戦争にかけてこの大砲がかかわる明治維新史を史料にもとづいて明快に論じるだけでなく、松本弘安（寺島宗則）の活躍などをも織り込み一つの面白い読み物にさえ仕立て上げた。蛇足ながら一つ感想をのべると、アームストロング砲については古く司馬遼太郎に佐賀藩に取材したノン・フィクションがあり（『小説現代』1965 年）、わが国でもそれなりに知られてきたと思う。佐賀藩が製造した大砲の威力については、従来の過大評価を戒めるのが近年の傾向ではないだろうか。

（二）山口論文　幕末に大量に英国にも流出した日本の工芸品は、62 年のロンドン万博に展示されてその装飾性が注目され、折から台頭した中世主義の芸術家やデザイナーに大きな影響を与えた。そしてその芸術家の中にはラファエル前派のロセッティ兄弟も含まれていた。こうしてヴィクトリア中期に広がった日本趣味の装飾性指向は日常的な家具や調度のデザインにも浸透して商品化される一方その嗜好は世紀末から 20 世紀初頭にかけての唯美主義の芸術家たちに受け継がれ、その爛熟の中で次第に形骸化し衰退していった。だが話はそこで終わらない。この英国での日本趣味の衰退と符節を合わせるように今度は日本でラファエル前派、とりわけロセッティの中世主義礼賛の風潮が広がって上田敏や蒲原有明らの文学活動を刺激し、その影響は漱石の描く女性像（たとえば『虞美人草』の藤尾）にも及んだ。またその影響は新生の洋画壇にも現われ、かつて日本が輸出した工芸の装飾性が藤島武二や青木繁の絵の中に帰ってきた。本論はこのように 1860 年代から 20 世紀初頭にかけて文学・芸術面に生起した日英双方向の文化交流の軌跡を、日本工芸の装飾性を結節点としつつ丹念に掘り起こした労作である。この文化交流が先に述べた第二の精神文化にかかわるタイプの一例であることは言うまでもない。

（三）福田論文　病気の側面から日英文化交流に光をあてる、それが論者の意図と見ていいのだろう。病気としては結核と梅毒が取り上げられ

る。初めに医学史上日英交流にかかわる基礎的な事項（ウイリスの役割と業績、明治新政府による英国医学からドイツ医学への国策転換など）が語られたあと、結核という病気の文化史上にもったロマン的性格が論じられる。日英の近代は期せずして結核にまつわる佳人薄命の神話を生み出した。本論ではとくに英国についてこの神話が「結核のロマン化」「結核の美化」「死の愛好」の三節にわたって詳述される。だがここまでの叙述は、文化交流史と言うより病気の社会文化史とでも言った方が適切だろう。次いで論述は梅毒に移るが、本論が文化交流論として生彩を放つのはこの部分においてである。論者によれば、日本における検梅（娼妓の梅毒検査）は、開国後、西洋諸国が居留地防衛のため派遣した陸海軍兵士の健康と士気を維持する目的で日本政府ないし当局に強く要請し、その結果として次第に制度化されるにいたった。このことは検梅制度が日本の発想ではなく、専ら西洋化の外圧、漱石の言う「外発力」の産物であったことを物語っていて誠に興味深い。論者も指摘しているとおり、英国では 19 世紀後半にジョセフィン・バトラーの検梅をめぐる伝染病予防法反対運動があり、フェミニズムの覚醒を促した。19 世紀の英国でこのようなことが起こりえたのに日本ではなぜ起こらなかったのか。そこには梅毒と売春をめぐる思想・文化の相違が予想される。梅毒・売春文化の日英比較研究が望まれる。

（四）中島論文　A. B. ミットフォードは英国外交官として明治維新の激動期の日本に駐在し（1866–70 年）、そこで攘夷事件の神戸事件とかかわり、備前藩士瀧善三郎の切腹に立ち会った。彼はこの切腹の情景とその次第を的確な文章に綴り武士道を礼賛したが、この文章は新渡戸稲造『武士道』（1899 年）にも引用された。ミットフォードは概してこのことで有名だが、むろんそれが彼の全てではない。彼は日本駐在後三年にして公職を退き、以後著作家として生涯を送った。本論は神戸事件にも触れてはいるが、彼の著作家としての思想遍歴をたどった点に特色があり、文化交流と言うよりそういう人物伝として読んだ方が面白い。彼は、日本のお伽噺や説話を集めて論じた主著『古き日本の物語』（1871 年）が端的に示しているように、日本文化の基層を追究して止まなかった。だが彼は武士道礼賛の場合と同様そこにも大和魂を発見してしまう。そして第一次世界大戦前

夜の晩年にはヒューストン・チェンバレン（B. H. チェンバレンの弟）のアーリア人種至上主義にのめり込む。彼の追究した文化の基層とは、どうやら人種思想であったらしい。

（五）大田垣論文　本論は旅行記を通じて日英の異文化見聞の比較を試みたものである（と評者は受け取った）。英国側としてはイザベラ・バードの『日本奥地紀行』と朝鮮・中国紀行が、日本側としては漱石の「満韓ところどころ」「倫敦消息」「昔」（スコットランド・ピトロクリ滞在記）が取り上げられる。論の内容は、バード vs. 漱石の大きな枠組みの下、これらの作品一つ一つにつき梗概説明、解説、文章描写の例示などがなされ、そのまとめがバード、漱石のそれぞれについて付されるという形になっているのだが、評者には疑問が残った。なるほど評者も読んだバードの『日本奥地紀行』は、旅行記としても異文化見聞録としてもじつに興味深く注目に値しよう。だが漱石はどうだろうか。「倫敦消息」は旅行記と言えるのか。そこには在外留学の下宿生活という異文化体験が書かれていると言うのなら、漱石先生神経衰弱の記とも言うべき「自転車日記」はなぜ取り上げないのか。また彼の「満韓ところどころ」は旅行記に違いないが、異文化見聞録と言えるだろうか。この旅行は旧友の満鉄総裁中村是公の勧誘で実現した大名旅行であった。その文章は別としてその内容は、評者の見るところ日本人の日本の植民地経営視察記あるいは日露戦争戦跡探訪記あるいは胃の病状報告とでも言うべき体のもので中国人の生活などろくに見てもいない。そして思うにバードと比べたとき、そういう点がこの旅行記の一特徴（相違点）ではないのだろうか。いったい比較（方法としての）とは何なのか。いや何と何をどう取り上げどう比べようと論者の勝手でそれが要諦なのだ、と言われればそれまでの話ではあるのだが。